

【論文】 初級日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の 聴覚印象評価に関する一考察

—母語のフィラーと日本語のフィラーの使用による違いはあるのか—

脇 貴子

日本大学大学院総合社会情報研究科修了生

A study of native Japanese speakers' listening evaluations of utterances of beginner Japanese learners

—Are there differences based on the use of native-language or Japanese filler words?—

WAKI Takako

Former graduate student of Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

This study examined the differences in the use of filler words by beginner learners of Japanese as a foreign language, in both Japanese and their native language, based on listening evaluations by native speakers of Japanese. The results revealed differences between the utterances using Japanese filler words and those using filler words from the learner's native language. It was found that utterances with Japanese filler words tended to be perceived better. There were particularly large differences in the "language" and "attitude" factor and the evaluation item "The use of filler words was appropriate." This demonstrates the importance of introducing Japanese filler words as part of Japanese language education for beginners.

1.はじめに

1.1 研究の背景

自然会話において間をつなぐ「あのう」「えっと」「なんか」など、いわゆるフィラー¹は、会話の流暢性を欠くとして否定される傾向にある。しかし、近年、コミュニケーションの解明に関わる言語研究の1つである談話分析²では、フィラーには、会話を行ううえで、沈黙回避、発話者交代、和らげなど、さまざまな機能や役割³があることが明らかになってきた。定延（2013：11）は、フィラーは沈黙を埋め

るだけの雑音とみなされ、長く軽視されていたが、近年、伝えるべきものがない言葉は、コミュニケーションにおいて無価値だという伝達論的コミュニケーション観の検討が、人類学や会話分析、倫理学などさまざまな学問領域でなされていると述べている。山根（2002：15-41）は、日本語のフィラー研究のあゆみを概観し、伝統的な国語学研究では文の研究が中心で、フィラーのような話し言葉の特徴ともいえる現象を取り上げる研究者は、ほとんどいなかったことに言及している。また、1980年代のコミュニケーション能力を重視した会話教育において、フィラーが会話の技術として重要視されたことを挙げ、当時は、フィラーの種類や対人関係に関わる機能についての説明は少なく、フィラー習得に絞った中間言語研究は行われていなかったことを指摘している。そして、1990年代以降、数量的なデータを伴った研究や言語

¹ フィラーとは、自分の言いたいことがよく分からない時などに自分の話を「埋める」(fill out) ための表現である (カメロン 2012 : 169)。

² 山根 (2002) は、「談話」を「話し言葉における1文 (1発話) 以上のまとまりのある内容をもった言語表現」とし、その談話について研究する分野を「談話分析」としている。

³ 山根 (2002 : 41) 表 2-2 フィラーの機能・役割より。

学以外の分野の知見を取り入れた研究など、多岐に渡る研究が本格的に行われるようになったとしている。例えば、談話をコミュニケーション行動として捉え、フィラーが認知言語学的に考察されている研究(定延・田窪 1995、定延 2013 他)や、フィラーの種類や使用頻度と印象の関係を数量的に分析した研究(砂岡他 2007、西山他 2007 他)などである。鎌田(2015:39)は、「自然な日本語、ありのままの日本語を観察すればするほど、『周辺の』要素⁴こそ、日本語を『生き生き』と『生きた』ものになっている」と述べており、フィラーを日本語に欠かせない表現の1つとして注視している。

フィラーの機能や役割が明らかになるにつれ、フィラーとコミュニケーションの関係という観点から、日本語教育分野では、フィラー指導の必要性が指摘されてきた(尾崎 1981、小西 2018、定延 2004、大工原 2010 他)。しかし、実際には、特に初級時において指導が行き届いているとは言えない状況である。

国内外で使用されている初級者用の教科書『みんなの日本語 初級 I』での「あのう」⁵を例にみると、第2課という早い時点で「あのう」が取り扱われている。「あのう、これコーヒーです。どうぞ。」という会話文で、お土産を渡す際の会話の切り出しとして、「あのう」が使われている。しかし、教師が使用する指導書『みんなの日本語 初級 I 教え方の手引き』に、「あのう」は学習項目として取り上げられていない。「あのう」はこの教科書内の会話文、会話練習文に合わせて9回使用されているが、いずれも同じ状況で、「あのう」の機能や使用法が、教師側から提示されるとは考えにくい。

現に、初級日本語学習者の日本語の会話を観察すると、日本語で話してはいるが、フィラーは母語という学習者が多い。西山他(2007)は、学習初期からの日本語学習者の発話データを分析した結果、初級レベルの学習者の発話には母語によるフィラーが多く、日本語によるフィラーはほとんど確認できないこと、中級レベルになると日本語によるフィラー

の数と種類が増加することを明らかにしている。石黒・布施(2018)は、初級・中級日本語学習者の話し方の問題点として、話している言葉は日本語、間に入るフィラーは母語になることを挙げ、中国人日本語学習者のフィラー使用傾向の変容を北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)のデータにより、縦断的に分析した。その結果、日本語のフィラーは、レベルが上がるにつれ増加し、中国語のフィラーに取って代わることが明らかになった。このように、日本語のフィラーは、日本語のレベルの向上とともに使えるようになるという実態も、初級時の指導がなおざりになる原因の1つと推察される。

1.2 研究の動機と目的

フィラーには、さまざまな機能や役割はあるが、フィラー自体に意味はなく⁶、日本語のフィラーを使っても母語のフィラーを使っても会話の内容に影響はない。そのため、会話の目的を情報の伝達とするならば、必ずしも初級時から、日本語のフィラーを使わなくてはいけないわけではない。しかし、会話における人間関係の構築に目を向けると、初級日本語学習者が使うフィラーが、母語のフィラーか日本語のフィラーかでは、話し手の話しやすさや聞き手の聞きやすさなどに違いがあり、コミュニケーションに影響を及ぼしているのではないだろうか。

本研究では、コミュニケーションにおける聞き手の印象に着目し、初級日本語学習者の母語のフィラーを使った発話と、日本語のフィラーを使った発話に対する日本語母語話者の印象の違いを明らかにすることを目的とし、検証を行う。

2. 先行研究

2.1 日本語のフィラーとコミュニケーション

山根(2002)は、日本語のフィラーを談話の構造ごとに分析し、それぞれの機能を分類した。講演の談話、留守番電話の談話、対話、電話の談話の4種類の談話資料から、使用されるフィラーを分析し、

⁴ 鎌田(2015)はフィラーや間投詞などを「周辺の」とし、状況と結びつき規則性があるとしている。

⁵ 本稿で取り上げるフィラーの表記は全て原文に従う。

⁶ 田窪(2005:14)は「フィラー自体が意味を持っていない」、石黒・布施(2018:8)は「発話内容自体に影響を及ぼすわけではない」としている。

「話し手の情報処理能力を表出する機能」、「テキスト構成に関わる機能」、「対人関係に関わる機能」の3つの機能に集約した。この3つを「境界指示」「発話の和らげ」「注意喚起」「沈黙回避」「間つなぎ」「時間稼ぎ」などに細分化し、それぞれ話し手と聞き手の双方からの存在意義という視点でまとめた⁷。

定延・田窪（1995）は、感動詞を話し手の心的操作に関わるものとみなす認知主義的アプローチ⁸によって、「ええと」と「あの（一）」の研究を行った。「ええと」は「目的となっている当該の検索・計算操作を明確化」するもの、「あの（一）」は「話し手が言語編集という聞き手の存在を予定する心的操作をおこなっている際に用いられる」（定延・田窪 1995：78-79）ものとし、話し手の心的情報処理の違いによる「ええと」と「あの（一）」の使い分けを明らかにした。また、これらの本質的機能は話し手の心的操作表示であり、聞き手にとっては、次の発話予測の手掛かりとなることから、「ええと」と「あの（一）」が「円滑な談話進行を可能にする」（定延・田窪 1995：90）と結論付けている。

これらの先行研究は、日本語のフィラーがコミュニケーションに関わっていることを裏付けている。しかし、これらは、研究者の主観的な印象により分類され、解明されたものであり、その根拠の妥当性が十分であるか疑問である。一方、砂岡他（2007）では、複数の日本語母語話者の講演時のフィラーの使用率と印象評価の関係を分析し、「講演でフィラーの使用が多くなると、自発的な印象が強くなる傾向がある」ことを明らかにした。こうした調査は、数量的分析に基づいた客観的な解明といえるであろう。

2.2 日本語のフィラー指導について

尾崎（1981：48-49）は、上級日本語学習者の伝達能力を観察し、発話内に英語の間投詞である [ah]、[er]、[um] が現れず、「あの」「その」「えー」「そう

ですね」などが現れていることについて、「自然な日本語を教えるためには、日本語の間投詞⁹（応答詞、感動詞も）を習得させる必要がある。」とした。他に、「話し手の意図や気持ちをより確実に相手に伝えるための一つの戦略として、日本語学習者にも積極的に教える必要がある」（ルカムト 2013：iii）や、「話すという行為はフィラーを発することを不可欠な要素として含み、それゆえ、日本語で話すという行為を学ぶことは日本語のフィラーを学ぶことを含む」（大工原 2010：24）なども、日本語のフィラーの指導の必要性を主張している。さらに嶋田（2015：188）は、談話教育の重要性を鑑み、「フィラーは重要であり、初級スタート時から学ぶことが大切である。初級はまず文型や語彙の学習に集中し、談話教育はそのあとでというのは間違いである。」と初級時の指導に言及している。山内（2009：42-44）も、初級で教えるべき学習項目にフィラーを挙げ、特に「あの一」は初級でしっかり教える必要があると指摘している。山内（2009）は、90人分の言語資料、KY コーパスにより学習者のレベル別にフィラー使用状況を分析し、「あの一・あの」は、上級者より中級者の使用が多いことを明らかにした。そして、中級者には誤用が多いことが考えられるため、初級でしっかり教えることを提言している。しかし、上級では「あの一」系列や「えーと」系列以外のフィラーが増えたことにも触れており、使用数の変動の直接的な原因や、どのような指導をすれば中級者の誤用を防ぐことができるのかは示されていない。

山根（2002：237）は、フィラーは「その頻度が高かったり、意味のまとまりのない位置に出現したりすると、話し手にとっては問題ないものであっても、聞き手にとっては迷惑信号である」と、フィラーを適切に使うことの重要性を示唆している。大工原（2010）は、フィラー指導の提言はあるものの、指導のための具体的な提案がない要因として、日本語のフィラーそのものの基礎的研究が遅れており、日本語のフィラーを適切に使用することがどういうこ

⁷ 山根（2002：237）表 8-1「話し手・聞き手からみたフィラーの存在意義」を参照されたい。

⁸ 大工原（2010：41）は、話し手の心的情報処理の状態に応じて、個々のフィラーが使い分けられているという前提に立つものが認知主義的アプローチであるとしている。

⁹ フィラーという名称は1990年以降、使われるようになり、それまでは、間投詞、感動詞、場つなぎ語等であった（山根 2002：38-39）。

とかが十分に明らかにされていない点を指摘している。また、フィラー指導の必要性の1つに、自然さを挙げ、「発音指導や文型指導などにおける日本語らしさ・自然さが志向されるのであれば、その一要素として日本語のフィラーにも目を向ける必要がある」（大工原 2010：17）と述べている。

一方、大平（2009）は、第二言語習得研究における「ネイティブスピーカー」の概念を再検討し、「ネイティブ」＝標準、「ノンネイティブ」＝逸脱という一般的な固定観念は認めつつ、これら二分化された「属性」は、多面的で動的であることを示唆した。金（2014）は、日本語学習者自身が学習到達目標に掲げる「日本人のような日本語」は虚像であり、日本語で物事が伝えられるというように、日本語を「もう一つの言語的手段」と捉えるよう、学習者の認識転換を導くことも教師の使命であると提言している。

現代のグローバル化において、非日本語母語話者が使う多様な日本語の容認が求められている。日本語のフィラー指導の検討には、個々のフィラーの特性の解明によるフィラーの適切な使い方の究明もさることながら、日本語のフィラー使用が、日本語らしさのためなのか、コミュニケーションのためなのかといった使用の目的に意識を傾ける必要があるといえる。そのためには、日本語のフィラー使用による効果や影響を明らかにすることが重要であり、ひいてはそれらが、具体的な指導法の開発につながると考える。

2.3 日本語母語話者の聴覚印象評価について

渡部（2005）は、母語話者の印象形成は、文法能力とは別に、談話能力によって評価されており、留学生の発話に対する日本語母語話者の印象は、「日本語」「親しみやすさ」「積極性」の3因子で構成され、日本語に対する印象だけでなく、留学生のパーソナリティや態度に対する印象が含まれていることを明らかにした。

印象評価を行う評価者については、日本語母語話者といっても、日本語教育に携わっているかいないかで、評価に違いがあるという指摘がある。例えば、日本人評価研究において、原田他（1998）は、一般の日本人は言語規則よりコミュニケーションの遂行

をより重要と考えることを明らかにした。小林（2002）は、教師ではない日本語母語話者が行う母語話者評価は、学習過程とリンクせず、印象、感想のレベルを含んだものであるとしている。前述の渡部（2005）では、教師の方が非教師よりも留学生に好意的な印象を持ち、寛容に評価することも明らかにしている。

2.4 本研究の位置づけ

以上の先行研究から、会話におけるフィラーの重要性や、日本語学習者への日本語のフィラー指導の必要性が窺える。しかし、指導に関しては、いずれも指導の提言やフィラーの使用実態の分析にとどまっており、日本語のフィラー指導の実践や、そもそも本当に指導すべきかという指導の根拠となるような使用の効果についての報告は、管見の限り見当たらない。

本研究では、初級日本語学習者の母語のフィラーを使った発話と日本語のフィラーを使った発話の印象の違いがあるかを検証する。その結果、日本語のフィラーの方が印象が良いことが導き出されれば、日本語のフィラー使用はコミュニケーションに役立つと考えられ、指導の根拠になり得るであろう。初級日本語学習者への日本語のフィラー指導を検討するうえで意義があるものと考ええる。

3. 研究方法

3.1 研究課題

本研究では以下2点を研究課題とする。

[研究課題1]

初級日本語学習者における母語のフィラーを使った発話と日本語のフィラーを使った発話では、日本語母語話者の印象に違いがあるかを明らかにする。

[研究課題2]

初級日本語学習者における母語のフィラーを使った発話と日本語のフィラーを使った発話では、日本語母語話者の印象にどのような違いがあるかを検証する。

3.2 調査方法

研究課題1では、まず、印象評価対象となる発話資料を収集する。発話資料は、日本語のフィラーを

学習項目として指導を受けたことのない初級日本語学習者と教師の会話を「母語のフィラーを使った発話」の資料、日本語のフィラー指導を受けた後の初級日本語学習者と教師の会話を「日本語のフィラーを使った発話」の資料とする。日本語母語話者は、発話資料の録音データを聞きながら、評価シートに評価を記入し、これを印象評価とする。印象評価を点数化し、「母語のフィラーを使った発話」と「日本語のフィラーを使った発話」に印象の違いがあるかを調査する。

研究課題2では、研究課題1で得られた印象評価の結果を評価項目ごとに点数化し、印象にはどのような違いがあるのかを分析し、考察する。

3.3 発話資料

発話資料は国内の日本語学校の初級学習者3名から収集した。授業後の会話練習の参加者を募集し、自主的に参加希望した3名で、詳細は表1のとおりである。募集時は、会話練習とだけ伝え、フィラーについての学習であることは伝えなかった。

表1 調査協力者情報一覧

協力者	母語	性別	年代	JLPT	来日時期
A	ベトナム語	男	20	なし	2019年4月
B	ベトナム語	男	20	なし	2018年10月
C	ネパール語	女	20	なし	2018年10月

山内(2009)は、初級で指導すべきフィラーに「あのう」と「えーと」を挙げている。ルカムト(2013:74)は、「談話標識の中で『あの』¹⁰はさまざまな標識として使用され、使用頻度も高く、使用に際しての制約が少ないため、すでに初級の段階でも学習者に使用できるレベルにまで導入したい」としている。岡崎(1987:175)は、「考えながら話す手段の高度化」である「えーと」を初級指導カリキュラムとして提案している。また、調査協力者が学習

¹⁰ ルカムト(2013)は、「あの」は「あのう」と同じ目的での使用を提案していることから、本稿では「あのう」に統一する。

に使用している教科書¹¹にも「あのう」と「えっと」が取り扱われていることから、本研究で指導するフィラーは、「あのう」と「えっと」とする。指導方法は、清水(2009:250)の指導法を参考に、明示的提示、アウトプット、フィードバックを取り入れた次の手順で行う。

＜日本語のフィラー指導の手順＞

- I 提示したテーマ¹²について教師と学習者が1対1で会話練習をする。(指導前の発話)
- II 学習者に日本語のフィラーの手引き¹³を提供し、教師はフィラーについて解説する。Iで学習者が使用したフィラーを指摘し、日本語のフィラーの使用を提案する。
- III Iとは別のテーマについて教師と学習者が1対1で会話練習をする。(指導後の発話)
- IV IIIの会話におけるフィラーについてIとの変化や、修正点などをフィードバックする。

以上の要領で協力者3名から、指導前の「母語のフィラーを使った発話」を6発話、指導後の「日本語のフィラーを使った発話」を6発話、合計12発話を収集した。文法力や語彙力、会話力などフィラー以外の部分は、できるだけ変化しないことが望ましいため、収集は指導時間も含め、1人につき、30分から40分程度を1日で行った。収集日は、それぞれ2019年5月10、17、24日である。会話は全てiPhoneの音声アプリ「PCM録音ボイスレコーダー」で録音した。

3.4 聴覚印象評価

音声データを日本語母語話者に聞いてもらい、印象評価シートに評価を記入してもらう形で印象評価を得る。まず、録音した発話をパソコンの音声編集

¹¹ 使用教科書は『みんなの日本語 初級 I』である。

¹² テーマは『まるごと 日本のことばと文化 初級活動 I A2 かつどう』のCAN-DOタスク、『みんなの日本語 初級 I』、『JF 日本語教育スタンダード準拠 ロールプレイトテスト』を参考に、依頼や提案、説明など、フィラーの機能「発話の和らげ」、「言語検索」などが現れやすいものを設定した。

¹³ 山根(2002)、ルカムト(2013)などを参考に筆者が作成した。

ソフト「audacity」に取り込み、前後の雑談部分をカットしたところ、12の発話資料は、いずれも1分から3分程度となった。それらをランダムに並べ替え、1回の再生で発話資料全てが聞けるよう編集し、1枚のCD-Rにした。発話資料の順番が評価に与える影響をできるだけ無くすため、並び方の違う2種類を作成し、これを聴覚印象評価用の音声データとした。印象評価に使用する評価項目は、渡部（2005）の印象評価項目を参考に作成した（表2）。

表2 印象評価項目一覧

区分	評価項目
日本語 (言語)	1.上手である
	2.流暢である
	3.自然である
	4.慣れている
	5.わかりやすい
	6.違和感がない
	7.知的である
	8.意思疎通ができる
親しみ やすさ (態度)	9.感じがいい
	10.この留学生と話してみたい
	11.親しみがある
	12.協力的である
	13.丁寧である
積極性 (性格)	14.内気でない
	15.積極的である
	16.リラックスしている
	17.自信がある
追加項目	18.スピードは適切である
	19.フィラーの使い方は適切である
	20.アクセントは適切である
	21.ポーズは適切である

このうち、8項目は「日本語」因子に含まれ、上手であるかや、分かりやすいかなど「言語」についての印象、5項目は「親しみやすさ」因子に含まれ、感じの良さや協力的か、丁寧さなど「態度」についての印象を示している。渡部（2005）は、印象には日本語に対する印象だけでなく、パーソナリティー

や態度に対する印象が含まれていると述べているように、「積極性」因子に含まれる4項目は、内気かどうかや積極的かなど、パーソナリティーを表す項目を含んでいることから「性格」についての印象を示しているといえる。また、本研究の目的であるフィラーに対する印象評価を明確にするため、評価項目に「フィラーの使い方は適切である」を加える。しかし、本研究では、フィラーに注視させることなく分析を行いたいため、印象評価への影響が考えられる要素である、「スピード」「アクセント」「ポーズ」（高村 2015、籠宮他 2007）の項目も加え、本研究の評価項目は、全21項目とする。評価は「どちらでもない」を避けるため6件法による回答とし、非日本語教師の日本語母語話者、10代から60代の男女19名分の印象評価を得た。

3.5 分析方法

研究課題1では、発話資料ごとに追加項目を除く印象評価項目すべての合計点とフィラーの出現率を算出する。それに基づき、発話資料を「母語のフィラーを使った発話」と「日本語のフィラーを使った発話」に分類し、得点の平均値から、印象に違いがあるかを分析し、考察する。発話資料内のフィラーは、小西（2018：95）の「語群とそこに含まれる書字形」に則って分類し、母音型フィラーを母語のフィラー、語彙型フィラーを日本語のフィラーとする。西山他（2007）は、文節数¹⁴、言い換え数、繰り返し数、フィラー数から流暢さを分析している。総文節数に対するフィラー数であれば、例えば、「先生はアー アノー エットー 七時前に アー 来たら大丈夫です。」¹⁵のように1つの発話文に複数のフィラーが出現した発話に対してフィラー出現率を明らかにすることができるため、フィラー出現率は、フィラー数/総発話節数（文節数）とする。

研究課題2は、「母語のフィラーを使った発話」と「日本語のフィラーを使った発話」の2分類について

¹⁴ 西山他（2007）は、「文節」としているが、山根（2002）は、談話分析においては、「文」ではなく「発話」、「文節」ではなく「発話節」という用語を用いている。本稿でも「発話節」と記す。

¹⁵ 今回収集した発話資料②における発話である。

て、評価項目ごとの平均値を算出する。そして、印象評価項目 17 項目と、追加した 4 項目の相関関係を明らかにしたうえで、はじめに、印象評価項目の 3 要因「日本語」「親しみやすさ」「積極性」の平均値から、違いを分析する。次に項目ごとの平均値の差を順位付けし、両者にどのような違いがあるかを分析し、考察する。

4. 調査結果と考察

4.1 研究課題 1: 母語のフィラーと日本語のフィラーの印象の違い

12 の発話資料における母語のフィラーの出現率、日本語のフィラーの出現率の分析の結果、指導前の発話資料は、全て母語のフィラーのみが出現し、日本語のフィラーの出現率は 0% であった。指導後は、母語のフィラーと日本語のフィラーの両方が現れた。本研究では、日本語のフィラー出現率が 0% のものを「母語のフィラーしか出現しなかった発話」、母語のフィラーが現れていても日本語のフィラーが現れたものを「日本語のフィラーが出現した発話」とし、分析を進める。得点は、評価項目のうち追加項目「スピードは適切である」「フィラーの使い方は適切である」「アクセントは適切である」「ポーズは適切である」の 4 項目を除く、17 の印象評価項目の合計点で、満点は 1938 点である。発話資料を「母語のフィラーしか出現しなかった発話」と「日本語のフィラーが出現した発話」に 2 分類し、得点順に並び替え、それぞれのグループの平均値と標準偏差、発話

ごとのフィラーの出現率を示したのが表 3 である。

「母語のフィラーしか出現しなかった発話」の平均値は 1208.17、標準偏差は 144.89、「日本語のフィラーが出現した発話」の平均値は 1304、標準偏差は 81.62 で、平均値の差は約 96 点となり、「日本語のフィラーが出現した発話」の方が点数が高い結果となった。「母語のフィラーしか出現しなかった発話」のうち、最も得点の高い発話⑨は、フィラーの出現率が 8.0% で、全発話資料の中でフィラーの出現率が最も低い。「母語のフィラーしか出現しなかった発話」の中で、得点の高い順に、発話①、⑩と続くが、いずれもフィラーの出現率は 20% 以下と低い。「日本語のフィラーが出現した発話」で最も得点の高い発話⑦のフィラーの出現率は 46.3% で、「日本語のフィラーが出現した発話」の中で最もフィラーの出現率が高く、母語のフィラーが 17.8%、日本語のフィラーが 28.5% で、日本語のフィラーの方が優位である。2 番目に得点の高い発話⑫のフィラーの出現率は 28.7% で、フィラーの出現率が 2 番目に高く、こちらも母語のフィラーが 7.7%、日本語のフィラーが 21.0% で、日本語のフィラーの方が優位という結果となった。「日本語のフィラーが出現した発話」のうち、最も得点の低い発話⑪は、母語のフィラーが 11.5%、日本語のフィラーが 10.1% と、両者が同じくらいである。「母語のフィラーしか出現しなかった発話」で上位の⑨と①、「日本語のフィラーが出現した発話」で上位の⑦と⑫は別の学習者の発話資料であるため、学習者による偏りはないと考えられる。

表 3 「母語のフィラー」と「日本語のフィラー」の 2 分類によるフィラーの出現率と得点

母語フィラー の発話資料	合計点	母語 (%)	日本語 (%)	全 (%)	日本語フィラー の発話資料	合計点	母語 (%)	日本語 (%)	全 (%)
⑨	1446	8.0	0	8.0	⑦	1420	17.8	28.5	46.3
①	1303	17.3	0	17.3	⑫	1367	7.7	21.0	28.7
⑩	1209	14.0	0	14.0	③	1328	6.1	10.2	16.3
⑤	1133	53.3	0	53.3	⑥	1264	2.4	7.3	9.7
④	1093	57.5	0	57.5	②	1237	9.2	18.4	27.6
⑧	1065	14.0	0	14.0	⑪	1208	11.5	10.1	21.6
平均値	1208.17				平均値	1304			
標準偏差	144.89				標準偏差	81.62			

以上の結果から、「母語のフィラーしか出現しなかった発話」と「日本語のフィラーが出現した発話」に得点の差があることから、印象に違いがあることが分かった。印象評価項目の点数は、印象が良いほど高くなるため、点数が高いということは、「母語のフィラーしか出現しなかった発話」より「日本語のフィラーが出現した発話」の方が平均値でみると、印象が良いといえる。また、点数とフィラーの出現率の関係から、「母語のフィラーしか出現しなかった発話」では、フィラーが少ない方が印象が良い傾向にあり、「日本語のフィラーが出現した発話」では、母語のフィラーより日本語のフィラーが多いとフィラー全体が多くても印象が良い傾向であるといえる。

4.2 研究課題2：具体的な印象の違い

4.2.1 要因にみる印象の違い

研究課題2の「母語のフィラーしか出現しなかった発話」と「日本語のフィラーが出現した発話」では、印象にどのような違いがあるかを明らかにする。

評価項目21項目の平均値と標準偏差は表4のとおりである。それをグラフで示すと図1となる。図1から分かるように、「母語のフィラーしか出現しなかった発話」と「日本語のフィラーが出現した発話」は、同じ波形をとっている。これは、母語のフィラーか日本語のフィラーかで得点は違っていても項目ごとの印象の度合いは同じであることを示しているといえる。

表4 母語のフィラーと日本語のフィラーの項目別平均値と標準偏差

区分	評価項目	母語フィラー		日本語フィラー	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
日本語	1. 上手である	3.45	1.15	3.78	1.01
	2. 流暢である	3.23	0.99	3.60	1.00
	3. 自然である	3.22	0.93	3.55	0.92
	4. 慣れている	3.25	0.98	3.64	0.90
	5. わかりやすい	3.53	1.05	3.96	0.99
	6. 違和感がない	3.10	0.85	3.40	0.87
	7. 知的である	3.32	0.87	3.68	1.01
	8. 意思疎通ができる	4.11	0.89	4.56	0.87
親しみやすさ	9. 感じがいい	4.14	0.99	4.52	0.76
	10. この留学生と話してみたい	4.02	0.93	4.25	0.91
	11. 親しみがある	4.22	0.92	4.46	0.90
	12. 協力的である	4.32	0.90	4.59	0.77
	13. 丁寧である	4.11	0.99	4.62	0.83
積極性	14. 内気でない	4.06	0.97	4.11	1.02
	15. 積極的である	4.04	1.00	4.14	1.04
	16. リラックスしている	3.56	0.98	3.91	0.97
	17. 自信がある	3.56	1.04	3.84	1.03
追加項目	18. スピードは適切である	3.92	0.95	4.18	0.77
	19. フィラーの使い方は適切である	3.52	0.94	4.20	0.94
	20. アクセントは適切である	3.63	1.01	3.96	0.86
	21. ポーズは適切である	3.80	1.03	4.14	0.82

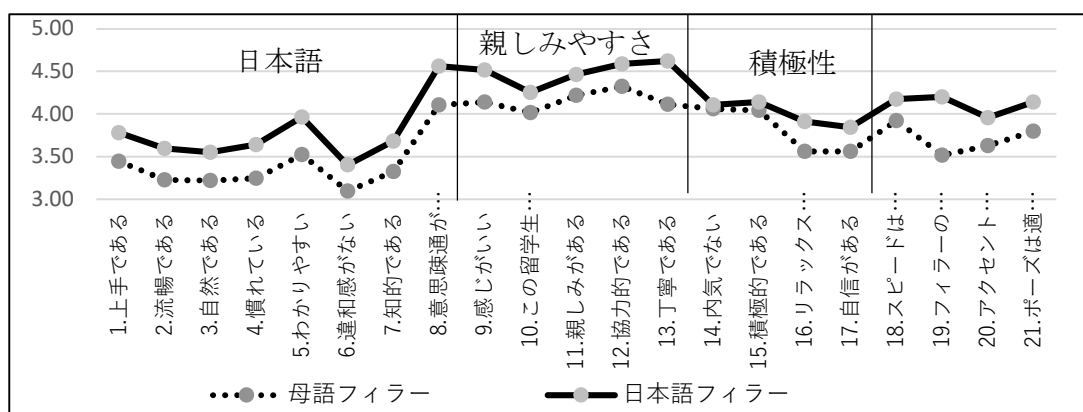


図1 母語のフィラーと日本語のフィラーの項目別平均値

評価項目について、渡部（2005）の印象評価項目17項目と、追加した4項目「スピードは適切である」「アクセントは適切である」「フィラーの使い方は適切である」「ポーズは適切である」のそれぞれの相関関係を調査したところ(表5)、項目14「内気でない」では、「アクセントは適切である」「フィラーの使い方は適切である」について、ほとんど相関がなく、「スピードは適切である」で弱い相関、項目15「積極的である」では、「アクセントは適切である」については、ほとんど相関がなく、「スピードは適切である」「フィラーは適切である」で、弱い相関があることが分かった。それ以外の項目では、いずれも中程度の相関、または強い相関があった。また、「ポーズは適切である」では、全17項目中12項目で最も相

関係数が高い結果となった。籠宮他（2007）は、印象を評定する心理尺度、「上手さ」「速さ感」「活動性」において、ポーズが大きな役割を果たしていることを明らかにしている。高村（2014）は、スピーチ指導の際、ポーズの指導が聞き手に聞きやすいという印象を与えるとしており、これら先行研究の結果と一致した。次に相関係数が高い項目が多かったのは、「フィラーの使い方は適切である」であった。フィラーに対する印象評価は、砂岡他（2007）や西山他（2007）で言及されており、今回の結果からも、印象評価へのフィラーの影響を示すことができたものと思われる。発話の印象には、フィラー以外の要素による影響も考えられるが、本研究では、フィラーについて着目し、言及する。

表5 追加項目とその他の項目との相関

	1.上手	2.流暢	3.自然	4.慣れている	5.わかりやすい	6.違和感がない	7.知的である	8.意思疎通ができる
スピード	0.902	0.882	0.869	0.794	0.867	0.916	0.893	0.865
フィラー	0.881	0.884	0.889	0.856	0.868	0.901	0.895	0.864
アクセント	0.895	0.815	0.824	0.783	0.834	0.860	0.826	0.821
ポーズ	0.964	0.958	0.939	0.939	0.957	0.893	0.859	0.926

	9.感じ	10.留学生	11.親しみ	12.協力的	13.丁寧	14.内気でない	15.積極的	16.リラックス	17.自信	総合点
スピード	0.905	0.886	0.735	0.626	0.826	0.275	0.246	0.578	0.619	0.866
フィラー	0.860	0.840	0.765	0.856	0.850	0.187	0.228	0.724	0.599	0.866
アクセント	0.860	0.805	0.606	0.783	0.825	0.113	0.092	0.508	0.504	0.791
ポーズ	0.853	0.866	0.720	0.939	0.849	0.405	0.429	0.728	0.746	0.936

印象評価の3要因の平均値と標準偏差は表6のとおりである。「母語のフィラーしか出現しなかった発話」、「日本語のフィラーが出現した発話」いずれも、平均値の高い順に、「親しみやすさ」「積極性」「日本語」となり、「日本語」、つまり言語にまつわる評価はどちらも低い結果となった。これは、発話資料が初級者によるものであるためと考える。「親しみやすさ」が最も高かったのは、発話者の態度の良さを表していると考えられる。そして、3要因とも「日本語のフィラーが出現した発話」の方が高い結果となった。差が大きかったのは、「日本語」の0.37で、次に「親しみやすさ」の0.33である。最も差が小さかったのは「積極性」の0.19となった。最も差が大きかったのは「日本語」だが、「親しみやすさ」とは0.04ポイントの僅差である。日本語のフィラーが言語や態度に影響しており、最も差が小さい「積極性」、つまり性格に関しては、母語のフィラーか日本語のフィラーかでの影響は小さいと考えられる。

表6 12発話資の3要因別平均値

区分	母語フィラー		日本語フィラー	
	平均値	標準偏差	平均値 (母語との差)	標準偏差
日本語 (言語)	3.40	1.01	3.77 (0.37)	1.00
親しみやすさ (態度)	4.16	0.95	4.49 (0.33)	0.86
積極性 (性格)	3.81	1.02	4.00 (0.19)	1.03

4.2.2 項目にみる印象の違い

「母語のフィラーしか出現しなかった発話」と「日本語のフィラーが出現した発話」では、印象にどのような違いがあるかを、項目ごとの平均値の差の上位5位(表7)と下位5位(表8)から検討する。

表7 項目の平均値の差の上位5位

順位	項目	区分	平均値の差
1	フィラーの使い方は適切である	追加	0.68
2	丁寧である	親しみやすさ	0.51
3	意思疎通ができる	日本語	0.46
4	わかりやすい	日本語	0.44
5	慣れている	日本語	0.39

表8 項目の平均値の差の下位5位

順位	項目	区分	平均値の差
1	内気でない	積極性	0.04
2	積極的である	積極性	0.10
3	この留学生と話してみたい	親しみやすさ	0.24
4	親しみがある	親しみやすさ	0.25
5	スピードは適切である	追加	0.25

表7が示すように、平均値の差が最も大きい項目は、「フィラーの使い方は適切である」(0.68)となった。評価者には、今回の調査がフィラーに関する調査であることは伝えていない。また、評価者に日本語教師は含まれていない。評価前の注意事項で評価の観点の説明として、フィラーの用語説明はしたが、そこにはアクセントやポーズの説明も加えており、フィラーに注視して評価が行われたとは考えにくい。このような状況で、最も差が大きい項目が「フィラーの使い方は適切である」となったということは、聞き手の印象においてフィラーが大きく関わっていることを示していると考えられる。山根(2002)は、フィラーの機能と役割として、話し手の都合で存在するもの、聞き手にとって有益なもの、話し手と聞き手の双方に有益なものがあることを指摘し、フィラーは話している本人が話しやすいためだけではなく、聞き手への影響があることを示唆している。「フィラーの使い方は適切である」に最も大きな差があり、「日本語のフィラーが出現した発話」の方が点が高いことから、日本語の会話においては、日本語のフィラーを使った発話の方がフィラーの使い方として適切であるという印象になることが示された。次に差が大きかった項目は「丁寧である」(0.51)となった。今回指導した日本語のフィラーは「あのう」と「えっと」であり、会話練習では、依頼や提案、説明といった場面を設定した。ルカムト(2010:72)は、日本語教育の現場において取り上げるべき談話標識の使用場面をまとめ、「あの」¹⁶は、相手に相談したいことがあり、時間を割いてくれるように頼むときなど、尊大に聞こえないようにするために、た

¹⁶ ルカムト(2013)の原文のまま表記する。

めらいを見せる必要がある場面に使用されるとしている。会話練習の相手である教師への提案や説明時に日本語のフィラーを使用したことが、「親しみやすさ」要因に含まれる「丁寧である」という項目の印象の違いに表れたと考えられる。続いて差が大きかった項目は、「意思疎通ができる」(0.46)、「わかりやすい」(0.44)、「慣れている」(0.39)で、どれも「日本語」要因に区分されている項目である。初級日本語学習者の発話では、母語のフィラーか日本語のフィラーかの違いが、内容の知的さや会話の上手さより「意思疎通ができる」「わかりやすい」「慣れている」という評価に関係する可能性があると考えられる。

一方、平均値の差が小さい項目は表8が示すように、「積極性」要因の「内気でない」(0.04)、「積極的である」(0.10)、続いて「親しみやすさ」要因である「この留学生と話してみたい」(0.24)、「親しみがある」(0.25)となった。これらは、母語のフィラーか日本語のフィラーかによる影響は小さく、特に「内気でない」は、母語のフィラーか日本語のフィラーかによる印象の違いがあまりないことが分かった。

5.おわりに

初級日本語学習者の母語のフィラーを使った発話と日本語のフィラーを使った発話では、日本語母語話者の聴覚印象に違いがあり、日本語のフィラーを使用することで、印象が良くなる傾向があることが分かった。また、母語のフィラーと日本語のフィラーの出現比率によって印象が違うことも明らかになった。具体的な印象の違いとして、日本語のフィラーは、言語や態度に対する印象に影響し、日本語の会話においては、日本語のフィラーを使った発話の方がフィラーの使い方として適切であるという印象になることが分かった。また、日本語のフィラーの使用が、「丁寧である」「意思疎通ができる」「わかりやすい」「慣れている」という評価に影響する可能性があることが示された。

話の内容に影響しないフィラーが、母語のフィラーか日本語のフィラーかで印象に違いがあることは、コミュニケーションにおける人間関係の構築にフィ

ラーが関係していることを示唆しているといえるであろう。また、日本語のフィラーを使用することで印象が良くなる傾向があるということは、日本語学習者の日本語のフィラー使用は、日本語らしさのためという表面的なものではなく、日本語による円滑なコミュニケーションを可能にするために必要な日本語習得の1つといえるのではないだろうか。

本研究により明らかになったことは、初級日本語学習者による日本語のフィラー使用の効果の一端である。しかしながら、初級日本語学習者に対する日本語のフィラー指導の検討に寄与するものとする。とはいえ、聴覚印象は、発話者の個性やフィラー以外の要素が深く関わっていると考えられる。また、本研究の指導後の発話資料は、日本語のフィラーのみではなく、母語のフィラーも混ざった発話であった。以上を踏まえ、フィラーの特性を考慮した実験方法の精査、より多くの発話サンプルの採集、発話者個々の詳細な観察を今後の課題としたい。

本研究は、聞き手の印象に着目し、検証を行ったが、会話は、話し手と聞き手の相互作用によるものである。日本語のフィラー指導の検討には、話し手側のフィラー使用の効果についての解明が併せて必要であると考えられる。

参考文献

- 石黒圭・布施悠子(2018)「中国人日本語学習者のフィラー習得過程の実態」国立国語研究所シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」発表用資料(未公開)
- 大平未央子(2009)「ネイティブスピーカー再考」『「正しさ」への問い』pp.85-109, 三元社
- 岡崎敏雄(1987)「談話の指導—初～中級を中心—」『日本語教育』62, pp.165-178
- 尾崎明人(1981)「上級日本語学習者の伝達能力について(国別の問題点-3-オーストラリア・ニュージーランドにおける日本語教育<特集>外国人の日本語の実態)」『日本語教育』45, pp.41-52
- 籠宮隆之・山住賢司・槇洋一・前川喜久雄(2007)「聴取実験に基づく講演音声の印象評定データの構築とその分析」『社会言語科学』9(2),

- pp.65-76
 鎌田修 (2015) 「文脈の活性化と談話の開華」『談話とプロフィシェンシー』 pp.32-54, 凡人社
 カメロン, デボラ著, 林宅男監訳 (2012) 『話し言葉の談話分析』 ひつじ書房
 金龍男 (2014) 「日本人のような自然な日本語」という虚像について」『早稲田日本語教育実践研究』 2, pp.81-90
 小林ミナ (2002) 「何を」教えるかの再吟味へ：日本人評価研究の意義と限界」『北海道大学留学生センター紀要』 4, pp.149-159
 小西円 (2018) 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」『国立国語研究所論集』 15, pp.91-105
 定延利之 (2004) 「音声コミュニケーション教育の必要性と障害」『日本語教育』 123, pp. 1-16
 定延利之 (2013) 「フィラーは「名脇役」か?」『日本語学』 32 (5), pp.10-25, 明治書院
 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの一」—」『言語研究』 108, pp.74-93
 嶋田和子 (2015) 「談話能力の育成をめざした教育実践」『談話とプロフィシェンシー』 pp.174-200, 凡人社
 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』 スリーエーネットワーク
 砂岡和子・保坂敏子・Yu Jingsong・河内彩香・山口真紀・藤田真一 (2007) 「フィラーに対する中国語と日本語の印象評価比較—クロスカルチャー・ミス・コミュニケーションコーパスの開発—」『電子情報通信学会技術研究報告 TL, 思考と言語』 107 (323), pp.19-24
 大工原勇人 (2010) 「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究—フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて—」神戸大学, 博士 (学術), 甲 4831 号
 田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ (特集 感動詞--未開拓の研究領域へ)」『言語』 34 (11), pp.14-21, 大修館書店
 高村めぐみ (2014) 「初級日本語学習者へのスピーチ指導—ポーズ指導の効果について—」『桜美林言語教育論叢』 10, pp.11-24
 高村めぐみ (2015) 「音声の講義と発音指導による日本語学習者の発話の変化：—アクセントとポーズを中心に—」『桜美林言語教育論叢』 11, pp.141-149
 西山友恵・斉木ゆかり・呉素蓮・土屋守正 (2007) 「流暢さとフィラーについての一考察」『東海大学紀要』 27, pp.43-54
 原田明子・小池真理・小林ミナ (1998) 「一般の日本人は学習者の日本語をどのように評価するか」『日本語教育方法研究会誌』 5 (1), pp.8-9
 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』 ひつじ書房
 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版
 ルカムト, ユリアナ・ルジェキ (2013) 「日本語における談話標識について：日本語教育の観点から」大阪大学, 博士 (日本語・日本文化), 甲第 16351 号
 渡部倫子 (2005) 「日本語母語話者は留学生の発話にどのような印象を持つか—共分散構造分析による構成概念の解明—」『留学生教育』 10, pp.97-104
- 参考資料**
 国際交流基金編著 (2014) 『まるごと 日本のことばと文化 初級 1 A2 かつどう』 三修社
 JF 日本語教育スタンダード準拠ロールプレイトスト, 国際交流基金 日本語国際センター
<https://jfstandard.jp/roleplay/ja/render.do>
 (2019年2月14日閲覧)
 スリーエーネットワーク編著 (2013) 『みんなの日本語 初級 1 第2版』
 スリーエーネットワーク編著 (2013) 『みんなの日本語 初級 1 第2版 教え方の手引き』
- (Received: January 24, 2021)
 (Issued in internet Edition: February 6, 2021)